

ヘミングウェイ文学におけるヒロインのプロトタイプ —— ジェーン・メイソンをめぐる ——

日 下 洋 右

The Prototypes of Heroines in Hemingway's Literature :
On Jane Mason

Yosuke KUSAKA

『アフリカの緑の丘』(*Green Hills of Africa*)¹ 第二部「追跡の追憶」の第一章の結末で、主人公(作者)とその妻が美男子とは誰か、美人とは誰かについて議論を交わしている。

“Well, who's handsome to you?”

“Belmonte and Pop. And you.”

“Don't be patriotic,” I said. “Who's a beautiful Woman?”

“Garbo.”²

“Not any more. Josie is. Margot is.”

“Yes, they are. I know I'm not.”

“You're lovely.” (65)

二人の会話で美人の一人にあげられているマーゴット (Margot) は、もちろん「フランシス・マコーマーの短い幸福な生涯」(“The Short Happy Life of Francis Macomber”)³ の女主人公で、主人公マコーマーの妻マーガレット (Margaret) のことである。確かに、彼女はこの物語の中で、話題にのぼるほどの美人として描かれている。例えば、“Mrs. Macomber. . . was an extremely handsome and well-kept woman of the beauty and social position which had, five years before, commanded five thousand dollars as the price of endorsing, with photographs, a beauty product which she had never used.”(5-6) という描写から、また “Margot was too beautiful for Macomber to divorce her. . .”(18) や “She had a very perfect oval face. . .”(8) という表現から、彼女は話題の対象となるのにふさわしい美貌の持ち主であることがわかるであろう。

バーニス・カート (Bernice Kert) が “In appearance, Margot Macomber with her perfect oval face . . . is without doubt modeled after Jane.”⁴ と明言し、ケネス・リン (Kenneth Lynn) が、“. . . the wonderful handsome, perfectly oval-faced Margot is the spitting image of Jane Mason.”⁵ と断言しているように、マーゴットはアーネスト・ヘミングウェイ (Ernest Hemingway) が1930年代の一時期恋愛関係にあったジェーン・メイソン (Jane Mason) を基にして作り出された人物である。⁶ ヘミングウェイ自身はマーゴットがその当時知っていた最低の悪女から手がかりを得て、完全に作り上げられ、想像された人物であるとしてジェーン・メイソンのモデル説を打ち消している。しかし、今日ジェーン・メイソンのプロトタイプ説を否定する人を見つけたことはむしろかしいであろう。

ヘミングウェイ夫妻は1931年9月にイル・ド・フランス号でフランスからニュー・ヨークへ向け帰国する途中、船中で友人のドナルド・オグデン・スチュアート (Donald Ogden Stewart) 夫妻か

らジェーン・メイソンとその夫グラント・メイソン (Grant Mason) を紹介された。ジェーンは当時22歳であったが、大きな青い目と完全な卵形の美しい顔立ちをしており、よく均整がとれて、曲線が美しく、背が高めのほっそりした運動選手のような体型をしていた。彼女は女優のグレース・ケリー (Grace Kelly) のような驚くほどの美人であり、⁷ 『日はまた昇る』 (*The Sun Also Rises*, 1926) のブレット・アシュレイ (Brett Ashley) のモデルとされるダフ・トワイデン (Duff Twysden) のようにセクシーであり、F.S.フィッツジェラルド (Fitzgerald) 夫人のゼルダ (Zelda) のように奔放であった。

マーゴットと同様に、ジェーンが化粧用クリームを推薦するための宣伝用写真のモデルとされた人物であった点も、彼女がいかに美人であったかの証しであると同時に、マーゴットのモデル説を裏づける証左でもある。マーゴットの “. . . her dark hair drawn back off her forehead and gathered in a knot low on her neck . . .” (10) のように、ジェーンも赤みがかった金髪を真中から分け、後ろになでつけてうなじで束ねて結ぶという地味なヘアスタイルをしていた。ジェーンはダンスが巧みであったが、大酒飲みで、向こう見ずなドライバーであり、海ではマーリン釣り、サファリでは大物狩り、クレー・ピジョンのすぐれた射手であったというように、地味な髪型とは全く対照的に多趣味で男勝りの活発なスポーツウーマンでもあった。

ジェーンは1909年6月24日にジェーン・ウェルシュ (Jane Welsh) として生まれ、⁸ ニュー・ヨーク市北部の裕福な人びとが住むタキシード・パークの屋敷で育てられた。彼女の母親が再婚したとき、自分の名前にケンダル (Kendall) というミドルネームを加えた。ニュー・ヨークのブライアクリフ・スクールでは、彫刻と絵画の才能を発揮していた。ジェーンの芸術に対する興味は、後にハヴァナでキューバの技術者の作品を専門に扱っているクラフトショップに彼女が投資したり、アートギャラリーを所有して経営したりすることへ発展した。しかし、彼女の関心は芸術の分野に限らなかった。というのも、彼女は語学にも堪能であり、三か国語を流暢に話したからである。

彼女はワシントン D.C. の社交界で二度デビューしたが、1927年彼女が18歳のとき二度目のデビューを果たした直後、パン・アメリカン・エアウェイズの創立者で、カリブ地域の支配人であった富豪のグラント・メイソンと結婚した。夫妻はハヴァナの西の郊外にあるハイマニタスの屋敷の所有者であり、そこで豪奢な生活を送った。

夫妻は1930年代の初め、イギリス人の男児を二人養子にし、ヘミングウェイが上の子アントニーの名付け親となった。夫の鈍感な性格から彼女が退屈してしまったため、また彼女自身子供ができなかったため、彼女は二人の子供を養子にすることによって、母親の務めに専念しようとした。しかし、彼女は母親業に没頭することができず、結局二人の子供をイギリス人の子守に直ぐに預けてしまった。ジェーンには気分が上機嫌から落胆へと急に激しく揺れ動いて、きわめて情緒不安定なところがあった。彼女の息子によれば、彼女は車の事故をたびたび起こし、気分のすぐれないときがよくあり、一生の間にあらゆる骨を折り、あらゆる病気をしたという。

1933年4月13日に、ヘミングウェイは2か月にわたるマーリン釣りのためハヴァナを訪れた。まもなく彼の妻ポーリン (Pauline) が二人の子供バンビィ (Bumby) とパトリック (Patrick) を連れてハヴァナを訪れ、5月13日まで滞在した。5月23日の夕方、パトリックと子守のアダ・スターン (Ada Stern) がキー・ウェストからフェリーでハヴァナに戻り、残留していたバンビィとヘミングウェイに合流した。

翌日の午後に息子の話を裏づける出来事が起こった。5月25日の『ハヴァナ・ポスト』 (*Havana Post*) 紙は、この出来事を次のように報じている。ジェーンはヘミングウェイの息子バンビィとパトリック、それに彼女の3歳になる養子のアントニーを大型のパッカートの後部座席に乗せて、特にどこへ行くという目的もなくハヴァナ空港近くの狭い道路をドライブ中、反対方向から猛スピード

で進んできたバスを避けようと道路の端に寄ったところ、路肩が崩れて彼女の車は土手から40フィート下に三回ひっくり返りながら落ちて、さかさまになった状態で止まった。⁹ 車は大破に近かったが、ジェーンと三人の子供たちは軽い打撲傷とかすり傷を負っただけで、車の前部座席の一部開いていた窓からはい出して無事であった。

全員が無事であったにもかかわらず、彼女はこの事故に大きな精神的衝撃を受けて、事故が自分の過失ではなかったのかと再三自問した。車の事故から数日後の6月初め、彼女はひどく意気消沈し、彼女の邸宅の二階のバルコニーから飛び降り自殺を図って背骨を折ってしまった。¹⁰ 彼女が自殺を試みたのは、これが最初ではなかった。これまでの自殺未遂は、いずれもそれほど深刻ではなかったのも、このときまでは夫はその種の出来事のことを彼女に注意を向けさせようとするジェスチュアにすぎないとみなす傾向があり、特に驚くことはなかった。しかし、夫は今回の状況についてはさすがに重大であると認識し、船内で再び自殺が図られないように工夫して、彼女を汽船に乗せてニュー・ヨークのドクターズ病院へ送った。彼女はそこへ5か月間入院し、回復するまでに1年間バック・ブレースをつけていなければならなかった。脊柱の治療の他に、彼女はフロイト派の著名な精神分析医ローレンス・キュービー (Lawrence Cuby) 博士の精神分析療法を受けることにもなった。¹¹

こまやかさに欠ける夫は、気分が激しく揺れ動き、自殺未遂を繰り返す妻が扱いにくくなったうえに、そのような妻に関心を払おうとしなくなった。そのため、彼女は自分と同じように冒険を求め、彼女に惜しみなく愛を与えたハヴァナのアンボス・ムンドス・ホテルに宿泊していた有名作家と接触を持ち続けることができたのである。¹² ジェーンは後年四人目の夫の死後、バーニス・カートとの質問にヘミングウェイとは結婚するばかりであったと答えている。もし二人がああ当時互いに結婚していなかったならば、おそらく二人は結婚していたであろう、とジェーンは語っている。二人の間には気さくにからかいあうようなことがあったにしても、口論など深刻な問題はなかった、とジェーンは二人の間にいさか이가あったことを打ち消している。

ヘミングウェイ夫妻は1933年8月から1934年3月まで、ヨーロッパを回ってからアフリカへサファリに出かけた。¹³ そのため、ヘミングウェイがジェーンと再会するのは、1934年7月まで待たなければならなかった。ヘミングウェイはこの年の5月に釣船ピラール号を所有したので、6月中旬にこの新造船に乗って単独ハヴァナへ向け出港し、10月26日までキー・ウェストに帰港しなかった。ピラール号は7月18日にハヴァナ港に入港したが、そのとき彼は健康を取り戻してキューバに帰っていたジェーンと再会し、夏の間に一緒に過ごした。ハヴァナに入港して間もなく、ポーリンがハヴァナに飛行機でやってきて数日間滞在した。彼女が到着した翌日、メイソン夫妻は新しいクルーザーのハヴァナ港到着を祝福するためにピラール号を訪れた。また、夫妻はポーリンと一緒に、エル・パシフィコという四階建てのエキゾチックなレストランで、ヘミングウェイの35歳の誕生日を祝った。ポーリンが9月に再びハヴァナへやってきたとき、ジェーンはタキシード・パークへ向けて出発していた。

ジェーンは前年にヘミングウェイが楽しんだアフリカの狩猟旅行に刺激され、1934年から35年の冬の間にアフリカへサファリに出かけた。彼女はロバート・ウィルソン (Robert Wilson)¹⁴ のモデルの一部とされたガイドのプロール・フォン・ブリクセン (Bror Von Blixen) 男爵¹⁵ に案内されてライオンなど大物狩りを試みた。ジェーンは冬期間長期にわたって狩猟旅行へ出かけていたので、ヘミングウェイは何か月間も彼女に会うこともできなければ、彼女からの便りもなかった。その冬のヘミングウェイの焦燥感の一部は、二人が離れ離れになっていたことに加え、サファリの過程でジェーンと性的関係があったといわれるもう一人の男性、イギリス人のリチャード・クーパー大佐 (Colonel Richard Cooper)¹⁶ にジェーンが深い関心を抱き続けていたという事実によって引き起

こされた可能性がある。

このような事情から、ヘミングウェイは1935年の4月14日にマグロ釣りをするためにピラル号に乗ってピミニに向かった。ピミニでは、ヘミングウェイ一家は大富豪のマイク・ラーナー (Mike Lerner) から貸与されたその島で最も豪華な屋敷に住んだ。家族がやってくるまでの当分の間、ヘミングウェイはジェーンにアフリカ狩猟旅行のことと、彼女のボーイフレンドのクーパー大佐のことを話してもらおうとする他に、一緒に釣りをしようという一種の招待状をジェーン宛てに送った。ジェーンはヘミングウェイの招待に応じ、2、3週間後ワインと美味な缶詰を持参してピラル号へやってきた。二人はピラル号に乗ってマグロ釣りを試みたものの、ジェーンがクーパー大佐のことが頭から離れなかったことは明らかであった。

アーノルド・ギングリッチ (Arnold Gingrich) が釣りの他に、ヘミングウェイの最新作をみせてもらうためと彼から意見や忠告を求められていたためピミニを訪れた。もっとも、ギングリッチはヘミングウェイの競争心に嫌気がさしていたので、釣りについてはあまり熱心ではなかった。ギングリッチは『コズモポリタン』(*Cosmopolitan*) 誌に掲載された作品と『エスクワイア』(*Esquire*) 誌に売られた作品をみせられ、自分の見解を述べた。彼が島を去ろうとしていた間に、ポーリンが彼をジェーンに紹介した。ジェーンが彼と四度目の結婚をすることになったのは、このときの出会いがきっかけであった。

1936年の3月の初めに、ジェーンがキー・ウェストを短期間訪問した。彼女はヘミングウェイとジョージ・ラッセル (Josie Russell) が4月末にピラル号でマーリン釣りをするため、キューバへ行く予定であるときいたので、彼女は5月にハヴァナで合流し、帰路の釣りの旅と一緒にしたいと申し出た。マーリンの釣果は乏しかったが、5月27日にピラル号はキー・ウェストへ帰港した。

ヘミングウェイが「フランシス・マコーマーの短い幸福な生涯」を執筆していた最中の1936年春の間中、彼はしばしばジェーンと会う機会をみついていた。しかし、その年の4月にヘミングウェイはジェーンとひどい仲たがいをしてしまった。ヘミングウェイが1932年4月にキューバ海域のマーリン釣りに引き付けられるようになり、ジェーンにもその釣り方を教えていた頃から二人の親密な関係が始まった。二人の関係が始まってからちょうど4年目にして、二人の間に軋轢が生じて後戻りできなくなってしまったのである。二人が不和に至った決定的な理由はみつけれないが、推測はいくつか試みられよう。例えば、二人の疎遠はジェーンとクーパー大佐との不倫の影響であったかもしれない。あるいは、ヘミングウェイ夫妻とチャールズ・トンプソン (Charles Thompson) がアフリカへサファリに出かけたり、釣船を建造したり、邸宅にプールを設置したりと、ジェーンとの関係に気づいたポーリンが夫を引きとめようとあれこれ手を打った結果であったかもしれない。

メイソン夫妻は1938年にハヴァナからワシントンへ引っ越したが、翌年二人は離婚した。ジェーンは1940年に弁護士ジョン・ハミルトン (John Hamilton) と、1947年に『タイム/ライフ』(*Time/Life*) 誌のヨーロッパ支部長兼『ヘラルド・トリビューン』(*Herald Tribune*) 紙のコラムニストであったジョージ・アベル (George Abel) と、1955年にヘミングウェイの友人で『エスクワイア』誌の編集主幹アーノルド・ギングリッチと各々結婚した。1981年にジェーンが亡くなったとき、彼女のベッドサイドにはグラント・メイソン、アーノルド・ギングリッチ、リチャード・クーパー、そしてアーネスト・ヘミングウェイの写真が置かれていた。

ヘミングウェイが1931年9月にジェーン・メイソンと知り合ってから1936年の4月に二人の関係を断絶するまでは、彼女に悪女性をみつけたような兆候は全くみられなかった。しかし、二人の関係の断絶後は、ヘミングウェイはジェーンを美人であるが、ガイドの白人ハンターと情を交わす

ような不実な女マーゴット・マコーマーとして風刺的に描き、最終場面では臆病な人間から勇敢な人間に豹変した夫の息の根をとめるという悪女としての最後の仕上げを彼女にさせたのである。

ヘミングウェイは『持つと持たぬと』(*To Have and Have Not*)¹⁷ に政府の大立者から同性愛者まで多種多様な人物を大勢登場させている。大勢の人物の一部として、ヘミングウェイはキー・ウェストの住人と彼を訪れたことのある来客を数人登場させている。その数人の登場人物の中には、姿を変えてはいるが、メイソン夫妻、ジョン・ドス・パソス (John Dos Passos) などが含まれている。トミー・ブラッドリー (Tommy Bradley) とエレヌ・ブラッドリー (Helène Bradley) 夫妻は、グラント・メイソンとジェーン・メイソン夫妻に密接に基づいて作り出された人物である。

エレヌ・ブラッドリーは、パールで覆い隠されたジェーン・メイソンの姿であるが、アーノルド・ギングリッチは、原稿の段階でエレヌ夫人がメイソン夫人であることを容易に見抜いていたうえに、ヘミングウェイが彼とジェーンとの性の冒険について描いていたことにも十分気づいていた。ギングリッチはメイソン夫人に魅せられ、後に彼女と結婚することになったので、彼が『持つと持たぬと』の中に認められるエレヌの性格描写にことさら敏感になっていたことは首肯できる。このような心理状態は、彼がエレヌの人物描写についてヘミングウェイに注意を促したという事実如実に示されている。実際、エレヌの人物像に関しては、『持つと持たぬと』の出版された版で描写されていることよりも原稿でははるかに多くのことが描写されていた。しかし、ヘミングウェイはギングリッチ、それにヘミングウェイの作品を出版していたスクリブナーズ社の編集主幹マックスウェル・パーキンズ (Maxwell Perkins) の忠告を受け入れて、そのほとんどを削除した。しかし、彼は実在の人物と虚構上の人物との関係について削除するだけでは彼の不安がおさまらなかった。名誉棄損罪で訴訟を起こされるのを恐れたため、ヘミングウェイは出版された小説の扉に「ノート」という形で、“... there are no real people in this volume: both the characters and their names are fictitious. If the name of any living person has been used, the use was purely accidental.” という否認文を載せることにしたのである。

虚構では夫のトミー・ブラッドリーは性的不能者であり、彼の妻が他の男と情を交わす場面をとときき目撃できる限りは、妻が己の肉体的欲求を満足させるために誰を求めようと気にすることはない。しかも、勇敢な人物に豹変する以前のフランシス・マコーマーのように、夫は気が弱い性格のため妻の尻に敷かれている。

妻のエレヌは背が高く、金髪で、顔立ちが美しい、胸の小さな女性であり、つやつやした髪を頭の後ろへなでつけ、カクテルガウンを後ろへ引きずっている。腰を振って歩く姿は、優美で、生氣にあふれ、セクシーでうっとりさせるところがある。このようなエレヌの容姿の描写には、ジェーン・メイソンの特質が明らかに認められる。

エレヌは怠惰な金持ちの一人であり、色情狂あるいは相手を選ばない乱交者などといわれており、マーゴットよりも悪女性がはるかに強い女性として描かれている。“Mrs. Bradley collected writers as well as their books...” (150) と風刺されているように、夫人は意気地のない夫に露骨に不貞を働き、彼女の恋人であるリチャード・ゴードン (Richard Gordon)¹⁸ に夢中になる。

ゴードンは目下のところ織物工場の労働者たちのストライキに関する小説を書いているプロレタリア作家である。しかし、プロレタリア作家を自任しているにもかかわらず、彼は金持ちの一人であり、実生活では退廃的な生き方をしている。ゴードンはジョン・ドス・パソスをモデルにして描かれた人物である。しかも、ゴードンは悪意をこめて風刺的に描かれたドス・パソスである。

結末に近い場面で、二人の同性愛者のヨットマンがブラッドリー夫妻のことを批判しているが、そのうちの一人はエレヌ夫人を売春婦と呼んでいる。もう一人は夫のトミーの性的不能が事実な

のかどうかたずねると、相手から彼は寛大なだけであると皮肉られる。それから、最初の同性愛者は、ブラッドリー夫妻を徹底的に誹謗する。“She represents everything I hate in a woman, and Tommy Bradley epitomizes everything I hate in a man.” (229)

最後に、ハリウッドの映画監督の妻は、ブラッドリー夫人を愚かで、気がよくて、実に利己的な悪女と呼んで彼女の評価を締めくくっている。しかし、作者は『持つと持たぬと』のブラッドリー夫人を、同じ悪女でも悪意に満ちた描き方をしている。「フランシス・マコーマーの短い幸福な生涯」でも、作者はジェーン・メイソンを悪女マーゴット・マコーマーとして風刺的に描いているが、『持つと持たぬと』ではジェーンをエレヌとして悪意に満ちたというよりも、むしろ敵意や憎悪に満ちた描き方をしているといえよう。このようなジェーンの辛辣な扱われ方には、1936年の4月に、ヘミングウェイとジェーンとの間に生じた苦々しいいさかいから、二人が断絶へ至った一連の出来事の影響が色濃く影を落としているとみてよいであろう。

注

- 1 『アフリカの緑の丘』は1934年5月11日に原稿が書き始められ、同年の11月16日に脱稿した。原稿は1935年2月7日にスクリプナーズ社に送られた。これは「アフリカの高原」(“The Highland of Africa”)と題され、エドワード・シェントン (Edward Shenton) の挿絵入りで『スクリプナーズ・マガジン』(Scribner's Magazine) 誌の1935年5月号から6回にわたって連載された。同年の10月25日に『アフリカの緑の丘』と改題のうえ、単行本として出版された。この小説の「前書き」によれば、作者はこの作品では人物も出来事も実在するものであり、想像力の作品と比肩できるかどうかを知るために絶対的に真実な本を書こうとしたのだと主張している。この作品は事実性という点では紀行文学的要素を、全体的な構成の点では小説的な要素を同時に備えた実験小説とみることができる。
- 2 グレタ・ガルボ (1905-90) のこと。スウェーデン生まれの米国の女優。マスコミ嫌いで、1941年に引退した。
- 3 「フランシス・マコーマーの短い幸福な生涯」は1934年末に書き始められて、1936年4月に脱稿し、『コズモポリタン』誌の1936年9月号に初めて発表された。1938年10月22日に刊行された『第五列と最初の四九短編集』(The Fifth Column and the First Forty-nine Stories) に再録された。アフリカでサファリ中の若いスポーツマンで富豪のアメリカ人、フランシス・マコーマーは深手を負ったライオンの前でパニック状態に陥り、その場から逃げ出す。結婚して11年になるマコーマーの妻マーゴットは、自分の客が脱兎のごとくライオンの前から逃げた後、勇敢にも近距離からそのライオンを仕留めた口数の少ない白人ハンターのテントを真夜中に訪れて、夫が臆病であることに対する軽蔑を示す。翌日マコーマーが恐怖を克服し、襲ってくる水牛に平然と立ち向かうと、マーゴットは背後の車の上から水牛を狙うが、夫を誤って射殺してしまうか、水牛を狙うふりをして夫を射殺してしまう。マーゴットが夫を故意に射殺したかどうかを曖昧にした点には、ヘンリー・ジェイムズ (Henry James) が「ねじの回転」(“The Turn of the Screw,” 1898) を曖昧にした方がよいと考えたことが底流にあった (James R. Mellow, *Hemingway: A Life Without Consequences* (Reading, Massachusetts: Addison-Wesley Publishing Company, 1992) 447-48)。「フランシス・マコーマーの短い幸福な生涯」は、恐怖の古典的研究の一つであるとする見方もある。この解釈に立脚すれば、ソマリアのことわざ「勇敢な人はライオンに三度怯える。」が強調される。それは初めてライオンの足跡をみたとき、初めてライオンの咆哮をきいたとき、初めてライオンに直面したときの三度である。このことわざの具現者こそ、臆病な人間から勇敢な人間に豹変するフランシス・マコーマーである (Mellow 446-47)。マコーマー (Macomber) という名字は、『アフリカの緑の丘』の中でヘミングウェイが自己を同一化したブワナ・ムクムバ (B'wana M'Kumba) という現地語に由来する。

- 4 Bernice Kert, *The Hemingway Women* (New York: W.W. Norton & Company, 1983) 275.
- 5 Kenneth S. Lynn, *Hemingway* (Cambridge, Massachusetts: Harvard U.P., 1998) 432.
- 6 ヘミングウェイとジェーン・メイソンとのロマンスは、ほのめかされることはあるが、強調されたことはこれまで一度もないといわれている。しかし、ジェーンの四人目の夫アーノルド・ギングリッチは、二人の間に熱烈な恋愛関係があったことを認めている。Denis Brian, *The True Gen: An Intimate Portrait of Hemingway by Those Who Knew Him* (New York: Grove Press, 1988) 88.
- 7 当時のクーリッジ (Coolidge) 大統領 (1923-29) は、ジェーン・メイソンのことをホワイトハウスを訪れたことのある人の中で最も美人であると語っていた (Jeffrey Meyers, *Hemingway: A Biography* (New York: Harper & Row, Publishers, 1985) 242)。グレース・ケリー (1929-82) は、米国の映画女優で、モナコ公国の王妃となる (1956)。交通事故で死亡した。
- 8 パーニス・カートはジェーン・ウェルシュではなく、ジェーン・コイル (Jane Coyle) として生まれたと述べて、全く異なる見解を示しているが、相違の原因ははっきりしない。Kert 235.
- 9 ジェーン自身はバンビとパトリックの二人の子供を車に乗せていたと証言しており (Brian 83), この説を支持している研究者もいる (Kert 249)。しかし、二人の子供の他に彼女の養子も乗せていたことは明らかである。この事故のことを翌日報じた7月25日付けの『ハヴァナ・ポスト』紙は、同乗者としてヘミングウェイの二人の息子の他に、ジェーンの息子アントニーもあげているからである (Michael Reynolds, *Hemingway: The 1930s* (New York: Scribner's Sons) 133)。さらに、アントニーが同乗者であったことを裏づける他の証拠もみつけれられる。1933年6月4日の『ハヴァナ・ポスト』紙は、アントニー・メイソンとのインタビュー記事を発表しており、その中でアントニーは数日前にハヴァナのアングロ・アメリカン病院で、例の自動車事故によって引き起こされた精神的衝撃の治療を受けたと語っているからである (Reynolds 133)。車が道路からはずれて、どこからあるいはどこへ落ちたのかについても諸説がある。谷間に落ちた (Kert 249) あるいは側溝に落ちた (Mellow 425) とする説の他に、ジェーン自身は崖から落ちたと語っている (Brian 86) が、7月25日付けの『ハヴァナ・ポスト』紙は、40フィートの土手から落ちたとしか伝えていない (Reynolds 132)。
- 10 自殺説に懐疑的な意見もある。ハイマニタスの邸宅の二階のバルコニーは地上から低いところにあるうえに、バルコニーの下には芝生や灌木が植えられているため、飛び降り自殺するには選びそうにない場所であるとみられるからである (Reynolds 133)。ジェーンが飛び降りた場所は、ハヴァナの彼女の屋敷ではなく、キー・ウェストのヘミングウェイの邸宅であったという説がある (Charles M. Oliver, *Ernest Hemingway A to Z* (New York: Checkmark Books, 1999) 214)。しかし、『ハヴァナ・ポスト』紙の報道は、この説が誤っていることを証明している。
- 11 1934年キュービィ博士は『サタディ・レビュー・オブ・リテラチュア』誌の主筆で彼の友人でもあるヘンリー・サイデル・キャンビィ (Henry Seidel Canby) の提案によって、「神経症的性質の近代文学」に精神分析の原理を適用した一連の論文を書いた。彼は最初の論文では、ウィリアム・フォークナー (William Faulkner) の『サンクチュアリー』 (*Sanctuary*, 1931) を分析し、第二の論文ではアースキン・コールドウェル (Erskine Caldwell) の『神の小さな土地』 (*God's Little Acre*, 1933) を探求し、第三の論文ではヘミングウェイの『日はまた昇る』 (*The Sun Also Rises*, 1926)、『武器よさらば』 (*A Farewell to Arms*, 1929)、『午後の死』 (*The Death in the Afternoon*, 1932)、『女のいない男たち』 (*Men Without Women*, 1927)、『勝者は何も得じ』 (*Winner Take Nothing*, 1933) を考究した。キュービィ博士はジェーンの治療医であり、彼女とヘミングウェイとの関係を知る立場にあったので、彼女自身厄介な問題に巻き込まれたと感じたし、ヘミングウェイにも迷惑をかけてしまったと感じて取り乱してしまった。キュービィ博士の一件は、彼女がリチャード・クーパーに夢中になっていた直後のことだったので、ジェーンに対するヘミングウェイの情熱を冷却させてしまうのに拍車をかけたかもしれない (Kert 70-71)。ヘミングウェイの作品に関するキュービィ博士の論文は、ヘミングウェイに出版を差し止められたため、彼の死後の1984年まで刊行されなかった (Meyers 247)。

- 12 ヘミングウェイはキューバ海域へ釣りに出かけたときには、ハヴァナのアンボス・ムンドス・ホテルに宿泊したが、ジェーンは欄間へよじ登って、そこから彼の部屋の中へ入ってくるのが好きだった、と後にヘミングウェイは息子のジャック・ヘミングウェイに自慢げに語った (Kert 249)。
- 13 タンガニーカ狩猟ガイド有限会社のケニア方面の管理人で、1909年にセオドア・ローズベルト (Theodore Roosevelt) のガイド役を務めたこともある伝説的なフィリップ・パーシヴァル (Philip Percival) がヘミングウェイ一行のガイドを引き受けた。パーシヴァルは1919年以来ケニアに住み、ナイロビの南20マイルのところにあるマチャコスボサ・ヒルで大きな農場を経営していた。ヘミングウェイ一行はそこに滞在した (Kert 264)。
- 14 ヘミングウェイは「フランシス・マコーマーの短い幸福な生涯」に登場する白人ハンターのロバート・ウィルソンにフィリップ・パーシヴァルの容姿他に、プロール・フォン・ブリクセンのいくつかの習癖を付与した。例えば、幸運なダブルの簡易ベッドを所持していたのはブリクセンであったし、ウィルソンのシニズムと女遊びもブリクセンに基づいていた。
- 15 プロール・フォン・ブリクセン男爵は、タンガニーカ狩猟ガイド有限会社のタンガニーカ方面の管理人であった。
- 16 リチャード (ディック)・クーパーは、その当時ジェーンのボーイフレンドであった。彼はナイロビにプランテーションを所有しており、大物狩りのハンターであった。「彼は私に会いにアメリカへやってきて、アフリカのハンティングについてヘミングウェイに話をした。」とジェーンは自ら語っている (brian 88)。ジェーンはサファリに出かけたとき、クーパー大佐所属のマンヤラ湖を見渡せる涼しい魅力的な家に滞在することになった。ジェーンの四人目の夫ギングリッチは、彼女がクーパー大佐とも不倫の関係にあったことを認めている (brian 88)。大佐は後に酔っている間に浅いプールで溺死した (Brian 88)。
- 17 『持つと持たぬと』は、1933年9月にマドリッドで書き始められて、翌年の4月の『コズモポリタン』誌に発表された「横断の旅」(“One Trip Across”)と、2年後の36年2月の『エスクワイア』誌に掲載された続編ともいえるべき「商人の帰還」(“The Tradesman’s Return”)の二編に大幅に手を加えて、1937年10月に長編小説として出版された作品である。『持つと持たぬと』は、一面からみれば1930年代の経済不況を背景に、金持ちと貧乏人の生活を対照させて、主人公ハリー・モーガン (Harry Morgan) の不運な出来事を描いた作品であるといえる。しかし、それ以上に、この小説はモーガンが個人主義の敗北を認めて社会的開眼を果たすが、その点を認識するには長い時間と一人の人間の全生命と全生涯をかける必要があったことを強調した作品である。
- 18 「持つもの」の一人であるリチャード・ゴードンは、実生活では労働者が直面している苦難とは無縁な生活を送っており、まじめな作家とは到底いい難い。第21章で描かれているゴードンの妻ヘレン (Helen) の強烈な独白は、夫の墮落した生き方に対する最も激しい糾弾である。

Works Cited

- 1 Baker, Carlos. *Ernest Hemingway : A Life Story*. New York : Charles Scribner’s Sons, 1969.
- 2 Brian, Denis. *The True Gen : An Intimate Portrait of Hemingway by Those Who Knew Him*. New York : Grove Press, 1988.
- 3 Burwell, Rose Marie. *The Postwar Years and the Posthumous Novels*. Cambridge : Cambridge U.P., 1996.
- 4 Flora, Joseph M. *Ernest Hemingway : A Study of the Short Fiction*. Boston : Twayne Publishers, 1989.
- 5 Hemingway, Ernest. *Green Hills of Africa*. New York : Charles Scribner’s Sons, 1935.
- 6 ---. *To Have and Have Not*. New York : Charles Scribner’s Sons, 1965.
- 7 ---. *The Complete Short Stories of Ernest Hemingway*. New York : Charles Scribner’s Sons, 1987.
- 8 Kert, Bernice. *The Hemingway Women*. New York : W.W. Norton & Company, 1983.

- 9 Knott, Toni D. *One Man Alone : Hemingway and To Have and Have Not*. Lanham, Maryland : University Press of America, 1999.
- 10 Lynn, Kenneth S. *Hemingway*. Cambridge, Massachusetts : Harvard U.P., 1998.
- 11 Mellow, James R. *Hemingway : A Life Without Consequences*. Reading, Massachusetts : Addison-Wesley Publishing Company, 1994.
- 12 Meyers, Jeffrey. *Hemingway : A Biography*. New York : Harper & Row, Publishers, 1985.
- 13 ---. *Hemingway : Life into Art*. New York : Cooper Square Press, 2000.
- 14 Nelson, Gerald B., and Glory Jones. *Hemingway : Life and Works*. New York : Facts on File Publications, 1984.
- 15 Oliver, Charles M. *Ernest Hemingway A to Z*. New York : Checkmark Books, 1999.
- 16 Reynolds, Michael. *Hemingway : The 1930s*. New York : W.W. Norton & Company, 1997.